

MANAGEMENT SCIENCES PROGRAM

広島大学大学院人間社会科学研究科人文社会科学専攻
マネジメントプログラム

2023 学校案内



HIROSHIMA UNIVERSITY

理論と実践の融合。

それは知識、幅広い視野、思考力、実践的な分析力。
知的好奇心が満たされる「理論と実践の会おう場」が
ここにあります。



新しい扉、開けてみませんか？



「融合」



「Turning Point」



Doctoral Program of
Management Studies,
Hiroshima University, Japan

スマートフォン等でQRコードを読み取っていただくと
マネジメントプログラムのPR動画をご覧いただけます。

CONTENTS

- | | |
|---------------------------------|------------------------|
| 04 新しい扉の前に立っているあなたに | 16 プログラム教員紹介／組織・経営分野 |
| 05 マネジメントプログラム紹介 | 18 プログラム教員紹介／会計・経営情報分野 |
| 06 マネジメントプログラムにおける理念・目標と養成する人材像 | 20 プログラム教員紹介／地域・交流分野 |
| 08 マネジメントプログラムの教育内容 | 22 在学生からのメッセージ |
| 10 アジアマネジメント教育プログラム | 24 修了生からのメッセージ |
| 11 マネジメントプログラムの歴史と概略 | 26 Q&A・オープンキャンパス |
| 12 マネジメントプログラムにおける教育研究指導 | 27 広島大学マネジメント学会 |
| 14 マネジメント研究センター | |

新しい扉の前に 立っているあなたに

1

本プログラムは、社会人、学部新卒、留学生と幅広い人材の受け入れを行っています。

民間企業や官公庁などで働く社会人はもちろんのこと、大学学部から進学を希望する学生や世界各国からの留学生まで、本プログラムでは幅広い人材の受け入れを行い、社会に有為な人材育成を目指しています。分野横断的な教員陣による科目の多彩さと、多様な分野に在籍する学生同士の交流や情報交換は、本プログラムにおいて見逃せない大きな魅力です。

2

本プログラムは、新しい時代の要請に対応した教育プログラムを提供します。

現在では社会の多様化、複雑化および専門化が格段に進み、さらに組織自体の急速な変化や構成員の流動化が加速しています。こうした状況のもとでは、個人が組織の枠を超えた広い視野と知識を習得し、さらに組織が最先端の理論やノウハウを持つ人材をその中で育成していくことは、大変難しくなっています。このような時代においてこそ、本プログラムのような、新しい時代の要請に対応した理論的かつ実践的な教育プログラムを提供する大学院が必要とされているのです。

3

本プログラムには、理論と実践が会う場という顔があります。

本プログラムは、研究者としての教員が学生を通じて現場に触れ、学生は最新の理論やノウハウに触れることによって、教員と学生が一体となったコラボレーションが行われ、新しい何かが産み出される場と考えています。実践サイドでは、広い視野と知識を持ち、最先端の理論やノウハウを持つ人材が現場で活躍することが必要でしょう。本プログラムはこのような期待を実現するための機会を提供いたします。このため、本プログラムでの授業・演習は、通常の講義形式にとどまらず、事例研究や、受講生の積極的な討論への参加によって成り立っています。これがまさに、実践的な思考の実験の場となるものと言えます。

4

本プログラムは学習・研究に至便な立地環境で昼夜開講を行っています。

本プログラムは、広島市内の中心に位置し、利便性に優れた東千田キャンパスに開設された都心型大学院です。日中、仕事をお持ちの方は、たとえ自己のブラッシュアップを志したとしても、仕事を終えた後に長時間を要する通学は難しいでしょう。交通の利便性が高い都心に位置する本プログラムにおいてならば、自己のブラッシュアップを志したその日から、仕事を両立させながら、学習・研究が可能となります。

➤ **新しい扉を開くのは、あなた自身。**



マネジメントプログラム紹介

名 称 広島大学大学院人間社会科学研究所人文社会科学専攻マネジメントプログラム

課 程 博士課程(前期2年、後期3年)

専攻所在 広島市中区東千田町一丁目1番89号(広島大学東千田キャンパス)

入学定員 前期課程/28名
後期課程/12名

募集対象 ●原則として、前期課程は大学卒業かそれと同等以上の方
●後期課程は修士修了かそれと同等以上の方

選抜方法 【前期課程】

学力検査(論文試験、面接)及び研究計画書の結果を総合して行う*。

- 論文試験/大学院における講義の受講や修士論文作成に必要な現代常識や文章力を問うもので、専門知識をみるものではない。
- 面接/問題意識の深さと勉強意欲を重視する。

【後期課程】

修士論文(又はそれに相当する論文)、学力検査(口述試験)及び研究計画書の結果を総合して行う*。

- 口述試験/研究課題が実務経験又は、修了後の進路との関連性を有し、具体的で実現可能であるか、博士課程を修了するに足りる専門知識及び語学力を有すると認められるか、を修士論文又はそれに相当する論文及び研究計画書を中心に試問を行う。

授業形態 開講時間帯/火曜日～金曜日…14時35分～17時50分(昼間・4時限)
18時00分～21時10分(夜間・4時限)
土曜日……………11時00分～18時25分(8時限)
※原則として日曜・月曜と祝日は休み

- 仕事を続けながらも、平日夜間及び土曜日^{のみ}の受講で修了が可能。
- 単位修得の便宜を図るため、夏期休業中にも集中講義等を行う。
- 博士課程前期における授業科目の履修は、あらかじめ指導教員の承認を得て行うことにより、専門分野の研究能力を高める。
- 論文の作成にあたっては、内容の充実を図るため、主たる指導教員の他に2名の副指導教員(計3名)によって論文指導を行う。

教員組織 専任教員/教授7名(うち常勤4名、特任2名、客員1名)、准教授7名(うち常勤5名、特任2名)、助教1名
専任教員以外に、各専門分野の研究者や高度な経験をもとに第一線で活躍している実務家を客員教員として配置している。

※詳細は直近の募集要項をご覧ください。

(2023年4月現在の現員数)

マネジメントプログラムにおける 理念・目標と養成する人材像

理念・目標

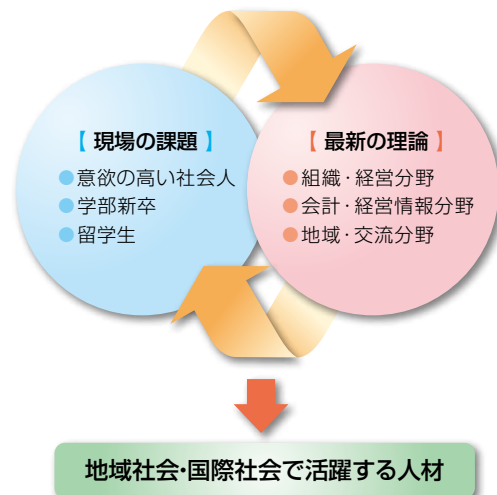
マネジメントプログラムは、現代社会の様々な現場から持ち込まれる、あらゆる組織が直面する課題を研究領域としており、研究者の最新の理論とビジネスや公的機関に従事する職業人の持つ現実とが、激しく交錯する「場」が形成されている。そこにはさらに、学部から直接進学した学生やアジアを中心とする留学生によって、異なる感性やグローバルな視点が加わって、世代間・国際間の交流が生み出されている。

このような特性を有する本プログラムの理念は、次の2点である。

1. 教育においては、こうした「場」で得られた知識や新たな知見が、高度専門職業人によって現実に適用されることを常に意識することである。様々な職場で働く深い問題意識を持った学習意欲の高い社会人は、コースワークと研究指導を通じてレベルアップして、職場や地域社会に戻っていく。学部からの直接の進学者や留学生は、それに加えて、彼らとの交流からビジネスの現場に対する理解を深めて、日本やアジア諸国における社会の第一線に出ていく。
2. 研究においては、現実の動きを鋭く捉え、新たな理論化を指向することである。これによって、これまでその必要性が何度も叫ばれながらも中々実現できなかった、理論と実践との相互交流を促進し、それを体現する研究者を養成していく。

マネジメントプログラムは、このような理念を掲げ、多様な出身・背景を持つ幅広い人々を受け入れて、組織の将来を担う人材の育成と地域社会への貢献を目指すものである。

理論と実践が融合する場



養成する人材像

- 地域の経済、社会、文化における独立心あるいは起業心あふれる人材
- 様々な組織の運営にかかわる専門的な知識と能力を有する人材
- 情報化・グローバル化に対応する交渉能力を有し、ネットワークを構築・運用できる人材
- 理論と実践の融合を図れる研究者

地域社会への貢献

マネジメントプログラムは、地域社会に対して次のような形で貢献することを目指している。

- 営利・非営利を問わず、あらゆる組織におけるマネジメント能力を向上させ、それによって地域社会の形成と問題解決を支援する
- 地元企業を活性化し、地域経済を振興させる
- 地方自治体や中央官庁と協調して、政策の企画立案や人材の養成に協力する

博士課程後期の教育理念

マネジメントプログラムの博士課程後期では、前期と同様に幅広い人々を受け入れている。最初から研究者を志向して博士課程前期から入学した学生もいれば、高度専門職業人としてさらにスキルアップするために、博士課程後期に進学して研究活動を続ける社会人もいる。また、大学等で教育・研究に携わっている研究者も在籍している。これらすべてに共通する理念は、理論と実践を融合できる研究者を養成することである。とりわけ社会人の場合は、実務的知識を活かして、実務や実践に密着した内容の博士論文の作成が期待されるが、こうした研究は、経験科学である社会科学において大きな意義をもっている。



年度別学位取得状況 [開設から令和4年度まで]

年度	平成13年度	14年度	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度
修士	▶24	34	24	24	20	23	14	9	26	20	17	17	19	15	19	12	19	10	17	17	19 ^{※4}	18 ^{※5}
博士	▶-	-	-	1	1	0	2	7	4	3	7	4 ^{※1}	2	1 ^{※2}	3 ^{※3}	6 ^{※1}	1	0	3	1	3 ^{※4}	2 ^{※1}

※1 論文博士1名を含む ※2 論文博士 ※3 論文博士2名を含む ※4 本プログラムへの改組前のマネジメント専攻修士を含む ※5 旧マネジメント専攻学生5名を含む

マネジメントプログラムの 教育内容

マネジメントプログラムの教育プログラムと提供する講義の特徴

マネジメントプログラム [MP] においては多様な分野の教員が講義を提供し、学生は指導教員の助言のもとで、自らの研究方向に合致した授業科目を柔軟に選択することができるように工夫している。このプログラムにおいて提供される科目群は大きくは次の3つの分野に分けることができる。

組織・経営分野

営利・非営利、また、その規模に関わらず、組織が何らかの社会的機能を果たすためには、様々な経営管理上の問題をクリアしなければならない。すなわち、対内的には組織内の意思決定プロセスの効率化や組織構成員のモチベーションを高め、また、限られた経営資源の効果的な展開とそれにもとづく新たな経営資源の蓄積を図る。さらに、対外的には活動対象や競合組織の動向を踏まえながら、より多くの支持・賛同を広く社会から得ることが必要となってくる。この分野においては、これら問題を解決するための専門知識だけでなく、その際に求められる論理的な思考についてもディスカッションを通じて身に付けるための講義を提供する。

会計・経営情報分野

会計系の領域は、財務会計論と管理会計論に大別される。これに会計政策・原価計算関係の科目を加え、営利・非営利を問わない企業や組織の行動を計数的に把握・制御するために必要とされる会計的な知識とセンスの修得を目指した授業を提供する。

経営情報系の領域では、人や企業の行動様式や相互関係、組織運営などが大きく変化している状況を踏まえ、組織変革を支える情報システムのあり方、サイバースペースを用いた情報伝達の効果やその活用による人間関係・組織活動の変化などについて、実証的な側面を含めた講義を提供する。

地域・交流分野

この分野においては、地域の自立かつ持続的発展、さらには地域で生活する人々が依拠する文化とコミュニケーションの深い理解をねらいとした地域と交流に関する講義を提供する。このうち、地域の分野においては、国際的な地域間の関係や協力、国内の地域経済・社会の現状把握や課題分析、地域の経営や振興、行政・NPO等による公経営や事業マネジメントなどを扱う。また、交流の分野においては、比較文化論、さらには日常生活やビジネスにおける異文化コミュニケーション論や異文化ビジネスコミュニケーションなどを扱う。





授業科目・科目群一覧

博士課程前期

● 必修科目

(研究科共通)
人間社会科学特別講義

(プログラム)
リサーチリテラシー
特別研究

● 選択必修科目(プログラム)

経営組織論
経営戦略論
経営管理論
イノベーション・マネジメント論
組織行動論
人的資源管理論
マーケティング論
国際マーケティング戦略論
アントレプレナーシップ
CSR論
市場戦略論
サービス経営論
財務会計論
会計政策論
管理会計論
コスト・マネジメント
税法ケーススタディ
税法コンプレッション
社会行動データ解析
情報システム管理学
情報ネットワーク論
経営情報システム論
企業とコミュニケーション
社会心理学特論

地域分析
公共経営論
地域経営論
国際関係論
地域協力論
フィールドワーク論
異文化コミュニケーション論
コミュニケーション原論
異文化ビジネスコミュニケーション
アジアベンチャービジネス論
アジア企業論
アジアビジネス事情
ビジネス日本語
マネジメント特講
日本の組織と経営
地域創成論
地域活性化
サステナビリティ・マネジメント論
ビジネス・エコシステム論
ビジネス・データ解析
社会調査
経済人類学
多変量解析特論

● 選択必修科目(共通)

(大学院共通)
「持続可能な発展科目」群
「キャリア開発・データリテラシー科目」群

(研究科共通)
人間社会科学のための科学史
異分野協働プロジェクト
未来創造思考(基礎)
ルール形成のための国際標準化
理工系のための経営組織論
平和教育の構築への実践的アプローチ
データビジュアライゼーションA
データビジュアライゼーションB
環境言論A
環境言論B
人文社会科学のための研究法と倫理
人文社会科学と社会
リサーチメソッド
教育科学のための研究法と倫理
教育科学と社会
Sheltered Instruction: Making Content Comprehensible
Religious culture in public education
Academic Writing for Graduate Students in Education
日本の教育開発経験

博士課程後期

● 必修科目

特別研究

● 選択必修科目

(大学院共通)
「持続可能な発展科目」群
「キャリア開発・データリテラシー科目」群

(研究科共通)
プロジェクト研究
人間社会科学講究

※上記は開設科目の一覧です。最新の個別具体的な授業科目の概要は下記のURLを参照してください。

<https://www.hiroshima-u.ac.jp/mgt/>

アジアマネジメント教育プログラム

アジア志向のマネジメント人材教育

アジアマネジメント教育プログラムは、アジア志向のマネジメント人材教育を提供するものである。日本型マネジメントの知識と能力を備え、中国や東南アジア、インドなどアジアの日系企業で経営幹部として実践できる人材と、この分野における理論と実践の融合を体現した研究者の養成を目指している。

理念・目標

本教育プログラムは、アジア諸国の経済発展に伴う人材養成ニーズの多様化に応えることを目的とする。経済発展に伴って、社会経済分野におけるアジア諸国からの留学生の関心は、従来の経済開発や社会基盤の整備から、日本型マネジメントを理解し実践することへと広がっている。

また、日本企業のアジア進出は、近年、より一層拍車がかかっている。日本企業は、中国を始めとするアジア諸国を生産拠点としてだけでなく消費市場としても位置づけるようになり、これに伴ってビジネスの現地化はさらに加速されている。その結果、日系企業が必要とするマネジメント能力の多様化・高度化が進み、現地マネジャーの育成が新たな経営課題として浮上してきた。

とりわけ、日本企業の海外雇用全体の3分の1を占める中国において、日系企業の経営幹部人材の育成が急務となっている。このため本教育プログラムの対象は、日系企業に優秀な人材を供給することを意図して、そこに就職を希望する留学生や日本人を対象である。

留学生への配慮や支援

- 秋季入学(10月)の選択
- その他採用実績がある留学生向け奨学生制度(原則としていずれの奨学金も入学後の申請、選考、選抜による)



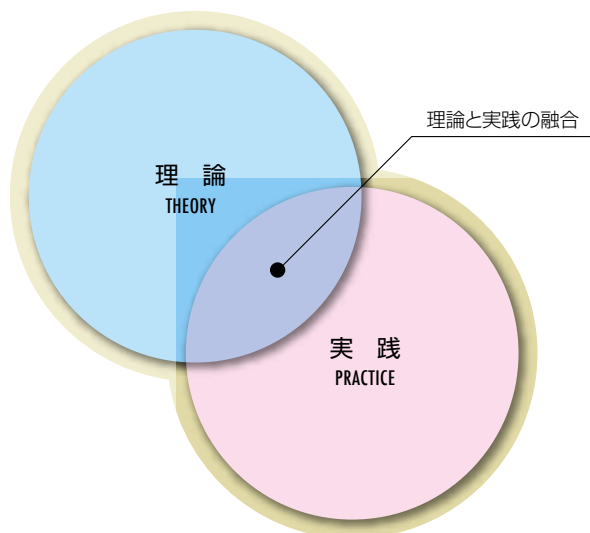
マネジメントプログラムの歴史と概略

マネジメントプログラムの歴史と概略

「マネジメントプログラム」は、2000年に発足した社会科学部マネジメント専攻(当時、独立専攻)にルーツがある。設立当初から、営利・非営利を問わず、マネジメントに関する「理論と実践の融合」を目的としている。マネジメントプログラムでは、博士課程前期ならびに後期を備え、修士・博士の両方の学位を輩出している。博士課程前期(修士課程)では、就労経験のある学生が、最新の理論と最先端の研究に熟達した教員の指導の下、組織・経営に関する様々なテーマについて研究している。博士課程後期においては、教員との協同研究・指導により、最先端の研究・調査に従事し、新たな理論の構築・発表が期待されている。なお、協同研究における成果発表のグローバル化が進み、国際学会での発表・国際的な出版もある。

さらに、「交流の場」も提供している。マネジメントプログラムは、中四国地方の中核都市である広島市の中区東千田町、旧広島大学跡地に立地している。つまり、交通の利便性がある都市型キャンパスで、異分野・異業種の人々が出会い、交流が盛んに行われている。在学中の交流も盛んであるが、修了後も長年続く傾向にもある。設立当初は、就労経験のある学生を想定していたが、昨今の博士課程前期では、大学卒業直後の人々も多数入学し、熱心に研究している。さらに、博士課程後期に進学する場合もある。

最後に、様々な国籍・宗教・文化を持ち、異なった言語を話す人々もマネジメントプログラムで、学んでいる。主にアジア・太平洋地域に重点を置いた異文化・国際理解の探究ならびに、異文化コミュニケーション・言語・地域に関する研究も盛んに行われている。海外にある複数の大学と協定を結び、多くの留学生を受け入れてきた。外国人客員研究員・国費留学生を受け入れた実績もある。博士課程後期においては、英語のみでの共同研究・指導が可能な場合もある。



マネジメントプログラムにおける教育研究指導



ゼミ(演習)

博士課程前期の教育は、コースワークと呼ばれる講義科目と、ゼミ(演習)によって構成される。一般のビジネススクールでは、ケーススタディなどのコースワークを主とする教育が行われているが、マネジメントプログラムでは、ゼミによる研究指導を通じた修士論文や課題研究の作成を重視している。学生にとっては、これらの作成は知的かつ体力的に消耗する作業であるが、それを成し遂げた満足感は何物にも代え難いものである。

ゼミの正式な科目名は「特別研究」であり、主指導教員による特別研究を2年間で4単位修得する必要がある。コースワークによる26単位と合わせて30単位以上を修得し、かつ、修士論文や課題研究が審査に合格すれば、「修士(マネジメント)」の学位が授与される。

主指導教員と副指導教員 による共同指導体制

学生は、その研究テーマに応じて、主指導教員の他に2名の副指導教員からも研究指導を受けている。日頃は主指導教員のゼミに出席しつつ、1年次修了時に提出するファーストイヤーレポート、修了半年前の時期に公開で行われる中間報告会など、折々のタイミングや必要に応じて副指導教員の助言を受けることができる。また、主指導教員と副指導教員が共同でゼミを実施する場合もある。マネジメントプログラムでは、このような体制によって、特定の領域あるいは教員に偏ることなく多角的な視点から研究指導を行っている。

これまでの修士論文と博士論文の題目は、本プログラムのWebサイト (<https://www.hiroshima-u.ac.jp/mgt/>) で閲覧することができる。また、それらの概要を記載した『マネジメント研究』は、広島大学図書館が運営する「広島大学学術情報ポジトリ (<http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/ja>)」を通じて公表されている。



修士論文と課題研究

修士論文については、何らかの意味での独創性(オリジナリティ)が要求される。研究論文とは、次のようなプロセスで書き上げられる。まず、これまで多くの研究者によって明らかにされてきた先行研究を精読・精査・分析する。次に、それらを基礎にしながら新たな調査や考察を行い、その結果と先行研究とを照合し新しい事実・真理を発見する。最後に、自分独自の主張として文章にあらわす。

さらに、社会科学においては、個別具体的な事例について丹念に調査し、詳細に検討した研究の積み重ねも、学問の進化に貢献してきた歴史がある。マネジメントプログラムでは、このような修士論文の枠には必ずしも収まりきれない、実践的なテーマに関する研究を課題研究(Project Research)とよぶ。

博士論文

博士論文においては、修士論文よりも質的かつ量的に充実した内容が期待されている。高度な独創性により学術的に何らかの貢献をなすことが必要である。マネジメントプログラムでは、学生が所定の期間で博士論文を作成できるよう、博士論文提出までの手順と標準的なスケジュールを作成・公表し、それを目安に論文作成指導を行っている。また修士論文作成と同様に、主指導教員1名と副指導教員2名による共同指導体制がとられている。

マネジメント研究センター



目的

本センターの目的は、新たな実践教育・課題解決の場を創造し、理論実践融合型マネジメント教育システムを高度化させ、社会人大学院モデルを深化させることにある。

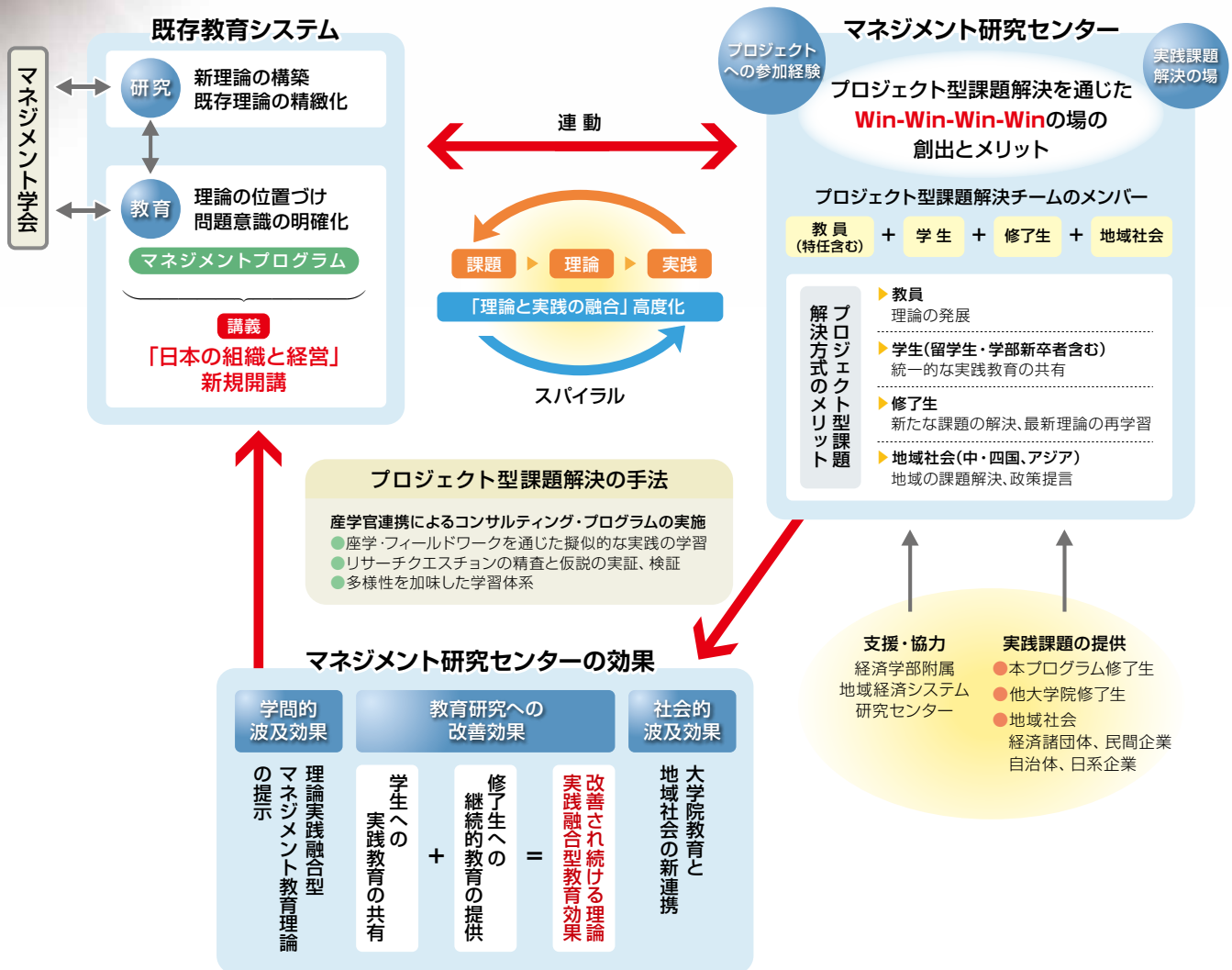
取組内容

本センターでは、修了生、地域社会から課題の提供を受け、プロジェクト型課題解決法によって課題の解決を図る。すなわち、課題ごとに教員・学生・修了生（課題提供者）・地域社会（課題提供者）によるチームを結成し、課題の解決に取り組み、その成果を実践に戻す。在籍する学生に対する実践教育の場を提供することにもなり、既存教育システムとのシナジー効果を高める。また、修了生に再び学ぶ機会を提供し、大学院と修了生の新たな関係構築を目指す。こうして、「理論と実践の融合」はさらに高度化させ、社会人大学院モデルの深化を図る。

マネジメント研究センターの3年間に及ぶ事業活動のうち、プロジェクト研究の成果をまとめたものとして、下記の書籍を出版した。

【書籍名】「連携による知の創造 -社会人大学院の新たな試み-」
【編 者】 広島大学マネジメント研究センター

【発行所】 白桃書房
【発行日】 2014年3月26日



組織・経営講座では、経営戦略、経営組織、組織行動、マーケティング・国際経営など、様々な組織におけるマネジメントを多面的に捉え、国際的な視野にも立ちながら研究・教育を行っている。また、最近では、学内だけでなく、他大学の研究者との共同研究も手掛け、着実に成果を上げている。営利・非営利を問わず組織におけるマネジメント問題に深く関心を持ち、積極的に問題解決を図りたい方、これまでの経験や実践を踏まえた新しい理論構築を目指したい方、さらには、純粋なアカデミックな世界に挑みたい方を、本講座では幅広く受け入れたい。

築達 延征 教授



CHIKUDATE Nobuyuki

担当科目

経営組織論
CSR 論

柔軟でサバイブする新たな組織デザイン・仕事のやり方

私は、organization theory(経営組織論)の中でも、組織文化・風土(体質)、メソドロジーを中心に研究してきました。マネジメントという言葉を知ると、利潤を求めめる民間企業を想定しがちです。しかしながら、経営組織論の枠組みでは、民間企業は一つの事例でしかないという立場をとります。NPOやNGOも経営組織に分類されます。したがって、私のゼミでの研究対象はGAFAに代表されるプラットフォーム企業から、日本の非営利組織(行政・学校・医療機関、NPO)まで含まれるようになります。学生の年齢、職業、性別、国籍も様々です。コロナ禍が増幅装置となり、組織づくり・仕事のやり方における従来の前提が崩れました。私のゼミでは、組織における様々な課題・あり方・方向性について研究する場を提供しています。なお、私の授業・研究指導は日本語と英語が公用語です。

主な研究業績 『組織人間たちの集合近眼—付度と不祥事の体質—』白桃書房(2019年)
The curse of the #1 carmaker: Toyota's crisis. Critical Perspectives on International Business, 2018, 14 (1): 66-82. (Can M. Alpaslanとの共著論文、2019 Emerald Literati Award受賞)
Academy of Management ONE-Kedge Unorthodox Paper Award受賞(2016年、単著論文)
Collective Myopia in Japanese Organizations: A Transcultural Approach for Identifying Corporate Meltdowns. Palgrave Macmillan, New York, U.S.A. 2015 (単著)
If human errors are assumed as crimes in a safety culture: A lifeworld analysis of rail crash. Human Relations, 2009, 62 (9) : 1267-1287. (学術単著論文)
Academy of Management Conference MED Division Outstanding Reviewer Award受賞(1998年、2001年)

ヴェサ・ペルトコルピ 教授



VESA Peltokorpi

担当科目

人的資源管理論
組織行動論

人的資源管理論及び行動科学(組織行動論)

私はオーストラリア、フィンランド、フランス、日本、そしてアメリカに住んでいました。私の研究分野は、人的資源管理(HRM)と組織行動(OB)です。特に、私は国際ビジネスの博士号を取得しており、日本で活動している外資系企業でのHRMおよびOB関連の問題に興味を持っています。研究業績として応用心理学、国際ビジネス研究、組織行動、経営学研究の各ジャーナルや、査読付きジャーナルに50本を超える記事を掲載しています。研究のトピックは、自主退職、仕事の満足度、外国語のスキル、そして異文化適応です。セミナーや講演では、研究と実践における理論の重要性を強調しながら進めていきます。

主な研究業績 Sample publications:
Language policies and practices in wholly owned foreign subsidiaries: A recontextualization perspective. Co-authorship. Journal of International Business Studies, 43(9), 808-833.
Transactive memory systems. Review of General Psychology, 12(4), 378-394.
When "embedded" means "stuck": Moderating effects of job embeddedness in adverse work environments. Co-authorship. Journal of Applied Psychology, 101(12), 1670-1686.

秋山 高志 准教授



AKIYAMA Takashi

担当科目

経営戦略論

イノベーション・マネジメント論

コミュニティ間を媒介する存在になりましょう

問題にぶつかる。社会人にせよ、学生にせよ、誰もが経験することだと思います。そういった場合に、誰に相談するかは重要な判断です。同じ世界、閉じられた世界で行動する人々からは、同質の体験を踏まえた、効率的な解決策を教えてもらえるかもしれません。しかし、異なる世界、外の世界と繋がることは、異質な価値観、行動様式に基づく、イノベティブなアイデアをもたらしてくれるかもしれません。つまり、日常の多くを過ごす職場やクラスから少し距離を置き、複数のコミュニティを媒介する存在となることは、そうした情報優位をあなたに与えてくれる可能性を高めることでしょう。

本研究室では、経営戦略論、イノベーション・マネジメント、社会ネットワーク論などの分析手法を用いて、人間関係や組織間関係におけるネットワークの全体構造や、そこでのポジショニングの在り方の是非を考察しています。

- 主な研究業績** 秋山高志「ネットワーク分析を用いた組織間関係の形成メカニズムに関する考察」『商学論集』福島大学経済学会、第82巻第3号、2014年、23-42頁
秋山高志「中国自動車産業のサプライチェーンの動態に関する探索的研究」村松潤一編著「中国における日系企業の経営」白桃書房、2012年、53-76頁
Akiyama, Takashi, "CSR and Inter-organisational Network Management of Corporate Group", *Asian Business & Management*, London, UK: Macmillan Publishers Ltd., vol.9, no.2, 2010, pp. 223-243.
秋山高志(田尾雅夫編著)『よくわかる組織論』ミネルヴァ書房、2010年
秋山高志訳(安田雪監訳)『Pajek を活用した社会ネットワーク分析』東京電機大学出版局、2009年、1-82頁

徐 恩之 准教授



SEO eunji

担当科目

マーケティング論

国際マーケティング戦略論

市場と顧客に対する企業の意思決定に関する研究

社会のスマート化とグローバル消費者のニーズ変動が著しく進んでいます。私の研究は、このような市場の環境変化を意識した企業のマーケティング戦略のリアルと理論に焦点を当てています。これまで私は、①顧客対応と顧客情報シェアを目指すマーケティング組織と技術部門の連携問題、②産業財企業の営業担当者の営業戦略にかかわる管理問題、③日本の製造企業の海外製品戦略と国際標準化のフィットネス、④限定商品を用いた希少性の追求、⑤日本のサービス企業の海外展開、について研究を行ってきました。最近では、日本の製造企業の国際製品戦略や企業のGreenwashing行動のコントロールを主としたサステナブルマーケティングに、特に興味を持って研究を進めています。

私のゼミでは、社会科学の諸理論枠組みを用いて、マーケティングマネジメント、国際マーケティング、営業マネジメント、消費者行動論に関連する諸問題を多面的に捉えることを目指します。そのため、ビジネスにかかわる諸問題と関連して世の中に役立つながらもクリエイティブな面で面白い研究を行いたいと思う人を歓迎しています。

- 主な研究業績** An empirical study of the relationship between marketing standardization and performance of Japanese firms in international markets: the moderating role of product strategy, *International Journal of Marketing & Distribution*, 2(1), pp. 15-24, 共著, 2018.
「営業担当者の志向と個人成果:部門間タスク・コンフリクトの媒介効果」『組織科学』第51巻第3号, pp. 87-97, 共著, 2018.
The impact of horizontal conflict on reducing vertical conflict in Japan's retail organizations, *International Journal of Organizational Analysis*, 25(2), pp. 217-232, 共著, 2017.
「職能横断的なコミュニケーションにおけるコンフリクトのトランスファーの影響」『組織科学』第45巻第3号, pp. 22-34, 単著, 2012.



この講座には、社会科学・行動科学・情報科学の多様な研究者が所属しているが、共通の研究対象は個人と組織の「情報」である。一説によれば、英語の "information" が「情報」と訳された本意は、「情けを報ずる」からきているとされる。このような「情け」は個人と組織の双方に存在し、行動に現れてくる。会計学や税法そして経営情報システムなどは、規則や論理が優越する冷徹な領域のように見えるが、その本質は、それらを扱う個人の心理や組織の特性と深く関わっている。この講座では、こうした観点から教育と研究を進めていく。

相馬 敏彦 准教授



SOMA Toshihiko

担当科目

社会心理学
社会行動データ解析

人の心理／行動から組織や社会にアプローチする

対人関係、組織、社会と個人の心理(モチベーション、感情、行動、認知、信念、特性など)との関わりについてデータに基づく研究を進めています。具体的にこれまでに研究室で取り上げたテーマを紹介しましょう。

- 社会的な場面 ●地域での有用な子育て支援ネットワークの構造、異文化・組織への加入状況での社会的適応メカニズム ●組織/集団の文脈 ●組織全体としてみた場合のパフォーマンス向上過程の解明、職場内・外でのサポートネットワークと職場適応(バーンアウト、離転職意思など)、組織の自己改革をもたらすための行動とその規定因 ●対人関係の文脈 ●人間関係のもつ功罪(サポートや虐待)、受け手の目標達成/モチベーションを高めるリーダーシップやコーチング、他者の満足を目指す相互作用(サービス)、ソーシャル・ネットワーク内での情報影響プロセス

これらのテーマは一見ばらばらのようにみえますが、いずれも心理学ベースで個人の行動や心理を起点に現実的な課題への解決策を探ろうとするものです。精神論や根性論では容易に解決できない組織の問題・社会の課題を行動科学的な視点によって解明しようとする点がこの研究室の特徴です。

- 主な研究業績**
- 「病院に就労する看護師・助産師への承認がモチベーションに与える影響～看護師と助産師の比較に焦点を当てて～」日本看護管理学会誌 第23巻、61-70頁、2019年
 - 「組織的公正が自己制御に与える影響は、雇用形態の違いや正規雇用指向によって異なるか?非正規従業員に生じるプロセスに着目して」産業カウンセリング研究 第19巻、1-15頁、2017年
 - 「攻撃的な人が不味い飲み物を与えるとき:挑発的行動と制御資源による影響」パーソナリティ研究 第26巻、23-37頁、2017年
 - 「ワンランク上のブランド・コミットメントはどう形成されるのか?顧客の潜在ランクへの分類と拡張版投資モデルのブランドへの適用」マーケティングジャーナル 第35巻、75-94頁、2016年

原田 隆 准教授



HARADA Takashi

担当科目

情報システム管理学
情報ネットワーク論

情報科学と社会科学の融合

はじめに私の研究について述べます。社会や産業が抱えている様々な問題、例えば、有効な情報共有や合意形成の方法、資源の効率的利用などについて、コンピュータや情報ネットワークを使って解決する手法を明らかにすることが研究の目標です。現在は特に分散型コンピュータシステムに興味を持っています。分散型コンピュータシステムとは、ネットワークで接続された複数のコンピュータが互いに協調・競合しながら全体として一つの処理を進めてゆくシステムです。インターネットに代表される情報通信技術の発展により、そのようなシステムを構築することは容易になりつつありますが、システムを矛盾なく、かつ効率的に動作させるにはまだまだ多くの課題があり、それらを解決する手法を研究しています。

一方、研究指導については、より幅広いものとなっています。情報科学がメインテーマである必要はなく、社会科学的な問題を情報という視点から解決したいという方をサポートしたいと思っています。

- 主な研究業績**
- T. Harada and M. Yamashita, "Constructing Non-Dominated m-Group Coterie for Group Mutual Exclusion," Proceedings of the 9th IASTED International Conference on Parallel and Distributed Computing and Networks, pp.119-126, Innsbruck, Austria, February 16-18, 2010
 - T. Harada and M. Yamashita, "Transversal Merge Operation: A Nondominated Coterie Construction Method for Distributed Mutual Exclusion," *IEEE Transactions on Parallel and Distributed Systems*, Vol.16, No.2, 183-192, 2005.
 - T. Harada and M. Yamashita, "k-Coterie for Tolerating Network 2-Partition," *IEEE Transactions on Parallel and Distributed Systems*, Vol.15, No.7, 666-672, 2004.
 - T. Harada and M. Yamashita, "Coterie Join Operation and Tree Structured k-Coterie," *IEEE Transactions on Parallel and Distributed Systems*, Vol.12, No.9, 865-874, 2001.

金 宰煜 講師



KIM Jaewook

担当科目

コスト・マネジメント
管理会計論

企業組織のマネジメント問題と財務・非財務情報の利用

企業経営の中、実際の経営者には株主、従業員、それに顧客など、さまざまなステークホルダーの多様な目的にあわせた成果、または価値を実現していくことが求められています。そのため、企業組織の中の経営者・管理者は、多様な情報を利用して、資源配分問題や、組織の業績測定問題、業績評価問題、そしてコスト改善問題などの課題解決に努めています。私の研究室では、このような組織の戦略と計画、意思決定、業績評価管理などにかかわる現実的な課題を、①マネジメント・コントロールシステム(MCS)、②情報(Information)、③パフォーマンス(Performance)の3つのキーワードに焦点をあてて検討、研究を行います。たとえば、1)組織のマネジメント・コントロールシステムと財務業績との関係、2)組織の財務・非財務情報の利用とパフォーマンス、3)組織の業績測定と分析問題などを、理論研究をベースに、企業組織へのインタビュー調査などをもとにした事例研究からアンケート調査データと企業の公表財務データを活用した分析研究までの、問題仮説発見から検証まで様々な研究方法で進めています。

主な研究業績

"Effect of Management Maturity Levels on Inter-organizational Management in Value Chain Relations" Journal of Modern Accounting and Auditing, Vol.12, No.2, 119-126, Feb. 2016.

"Project Management Processes and the Organizational and Financial Benefits" Asia Pacific Management Accounting Association, The 6th APMAA Forum (Taipei, Taiwan), 2010

『医療・NPO 経営管理ガイドブック』(Robert N. Anthony and David W. Yong, Management Control in Nonprofit Organizations, 7th Edition, McGraw-hill, 2003)中央出版社、161-281頁、2010年

"The relationship between Program Management Control and Product Development Management Control: the case of Japanese manufacturing industry" European Institute for Advanced Studies in Management 9th Manufacturing Accounting Research Conference (Proceedings), 2009

『事業プログラムと製品開発プロジェクトのためのマネジメント・コントロールの関係性の考察ー PBSC フレームワーク構築のためのアプローチとしてー』『メルコ管理会計研究』1巻1号、47-58頁、2008年



本講座は地域と交流の2つの柱から構成されている。前者では、地域の自立的かつ持続的発展をねらいとして、地域の現状把握と課題分析、問題解決のための立案とその有効性の検討などをテーマとしている。後者では、地域で生活する人々が依拠する文化とコミュニケーションの深い理解をねらいとして、ビジネスのみならず、日常生活における交流の諸側面をテーマとして扱い、ともに一連の講義や特別研究を行う。

小柏 葉子 教授



OGASHIWA Yoko

担当科目

国際関係論
地域協力論

「地域」を分析窓口としたグローバル化時代の国際関係研究

グローバル化の進展に対応し、世界各地では、様々な「地域」が活発な動きを見せています。それは、たとえば、EUやAPEC、ASEANのように、複数の国にまたがるマクロなものから、一つの国の中の地方のようなミクロなものまで様々なレベルにおよび、また、その担い手も国家のみならず、企業、市民社会、コミュニティと多様です。そして、イシューも、政治・安全保障、経済、環境、社会・文化と多岐にわたっています。本研究室では、このような多様な「地域」を分析窓口として、グローバル化時代の国際関係について考察していきます。私自身の専門領域は、太平洋島嶼諸国の地域協力ですが、そこから派生して広域協力としてのアジア太平洋地域協力、その中で日本の位置づけ、また比較としてのヨーロッパの地域協力についても研究関心を広げています。柔軟で学際的な視角に基づいた国際関係研究を皆さんと目指していきたいと思っています。

主な研究業績 『〈紛争〉の比較民族誌—グローバル化におけるオセアニアの暴力・民族対立・政治的混乱』春風社、2016年、共著
『太平洋島嶼地域における情報通信政策と国際協力』慶應義塾大学出版会、2013年、共著
『変貌する権力政治と抵抗—国際関係学における地域』彩流社、2012年、共著
『アジア太平洋と新しい地域主義の展開』千倉書房、2010年、共著
New Regionalisms in the Global Political Economy: Theories and Cases, (London: Routledge, 2002) 共著
Microstates and Nuclear Issues: Regional Cooperation in the Pacific (Suva: Institute of Pacific Studies, University of the South Pacific, 1991)

盧 濤 教授



RO To

担当科目

異文化コミュニケーション論
異文化ビジネスコミュニケーション

異文化に迫る、コミュニケーションに迫る

当該研究室では、文化、言語、コミュニケーション、交渉、ビジネスをキーワードに掲げ、異文化コミュニケーション及び異文化ビジネスコミュニケーションに関する研究を学際的、総合的に行っています。目下、私自身は主に4つの分野に関心を持っており、マネジメントプログラム在籍生の皆さんと議論しながら、関連する分析の作業を進めています。4つの分野とは、1)異文化どうしの「交渉観」の把握、2)異文化認識の分析、3)コミュニケーションの研究、4)異文化交渉の考究、です。もちろんこれらと異なる研究テーマも歓迎するし、ゼミ生の皆さんの意思を尊重して、自由闊達なゼミの雰囲気の中で研究生生活を楽しんでいきたいと思っています。マスコミの主張や教授の学説に惑わされず、自分の生活経験や実務経験、学習経験から生まれた判断力、洞察力を頼りに物事を見て、自分の言説を立てていただきたいと皆さんに期待します。

主な研究業績 『コミュニケーションと異文化へのまなざし』広島大学出版会、2022年
『在中国日系企業の言語戦略—現状と対策』『中国における日系企業の経営』白桃書房、2012年
『日本人学生のコミュニケーションの捉え方』『北京大学日語学科成立 60周年国際研究会論文集』学苑出版社、2008年
『日中ビジネスコミュニケーション研究の現状と課題』『マネジメント研究』第8号、2008年
『日本における異文化コミュニケーション研究の歴史と現状』『マネジメント研究』第7号、2007年
『“交渉”源流考』『中国文化の伝統と現代』東方書店、2007年

松嶋 健 准教授



MATSUSHIMA Takeshi

担当科目

フィールドワーク論
コミュニケーション原論

ポリフォニックな社会・自然・地域を構想する

人類学は素人としての感性を大事にする学問です。あたり前なことに対して素人は驚き、どうしてこんな風になっているのか、なぜこんなことをするのだろうかという問いを発します。こうした驚きから生まれる「はじまりの問い」を手放さず、同時にそれを学問的に深め鍛え上げていくこと、これが人類学的な方法論です。その土台にあるのは、自ら動き、感じ、そして変容しうる身体として私たちが存在しているということです。フィールドワークによって新たな感性を開き、他者との真のダイアログを通じて共に知性を育てていく、研究室をそのような学びほぐしの場にしていけたらと考えています。

忘れてはならないのは、私たちが人間だけの世界に生きているのではないということ。「社会」は生きた人間からのみ成り立っているのではなく、そこには風や土や水、他の生き物たち、そして死者や神々もまた関与しています。そうした様々な存在との関係性や対話のスペースをケアすることで、複数の声と論理からなるポリフォニックな社会・自然・地域を耕し構想すること。この課題を、皆さんとともに身近なトピックから考えていきたいと思っています。

主な研究業績 『ブシコ ナウティカ―イタリヤ精神医療の人類学』単著、世界思想社、2014年
『トラウマを生きる―トラウマ研究1』共編著、京都大学学術出版会、2018年
『トラウマを共有する―トラウマ研究2』共編著、京都大学学術出版会、2019年
『文化人類学の思考法』共著、世界思想社、2019年
『サブスタンスの人類学』共著、ナカニシヤ出版、2023年
『アートの根っこ―想像・妄想・創造・捏造を社会へ放つ』共著、晃洋書房、2022年
『心のお仕事―今日も誰かのそばに立つ24人の物語』共著、河出書房新社、2021年
『世界の手触り―フィールド哲学入門』共著、ナカニシヤ出版、2015年

ヴァンバオ ゴック 助教



VUONG Bao Ngoc

担当科目

マネジメント特講(ファイナンス)
マネジメント特講(インベストメント)

コーポレート・ガバナンスにおける行動経済学的アプローチ

コーポレート・ガバナンスは、経営者と投資家との間で生まれるものです。しかし、それぞれの意思決定はいずれも認知的な心理プロセスによって影響されており、完全に合理的なものとはいえません。このような背景から、私は、経営者のバイアスや非合理的な投資家が、企業活動、特に企業の社会的責任に与える影響を研究することに関心があります。経営者や投資家の意思決定の背景にある原動力を探り、政府や政策立案者がその知見を活用して、どのように企業に一層、効率的かつ責任をもって振る舞うよう方向付けることができるかを考えたいと思います。

主な研究業績 Vuong, N. B., & Suzuki, Y. (2021). The motivating role of sentiment in ESG performance: Evidence from Japanese companies. *East Asian Economic Review*, 25(2), pp. 125-150.
Vuong, N. B., & Suzuki, Y. (2020). Impact of financial development on sentiment-return relationship: Insight from Asia-Pacific markets. *Borsa Istanbul Review*, 20(2), pp. 95-107.
Vuong, N. B., & Vu, T. T. Q. (2018). Size, value, and momentum in stock returns: The case of Latin American emerging markets. *AESTIMATIO, the IEB International Journal of Finance*, 17, pp. 82-103.

柴田 浩喜 客員教授



SHIBATA Hiroki

担当科目

地域分析

地域経済の持続性を考える経済分析を学びます

地球環境問題の深刻化、経済のグローバル化の進展と格差拡大など、世界そしてわが国が現在直面する問題に対しては、国による画一的政策の有効性が低下し、地域による取り組みが不可欠になっていると考えられます。地域の産業振興策や活性化策は、地域活力の向上だけでなく、国レベルの問題解決に重要な役割を持つようになっていますが、地域は各々特性を持つため、産業政策にも分権化が強くと求められるようになるでしょう。

私達を取り巻く変化への対応を考える上で重要な価値基準が持続可能性です。持続可能性には、生存のための環境を維持する環境的持続性、社会の公平性を重視する社会的持続性、そして経済的持続性が考えられます。授業で志向するのは地域経済の持続可能性であり、趨勢変化やショックに対応できる内発力や適応力を備えた経済です。授業では、地域経済の持続可能性を検討するための経済構造分析や成長分析の手法・理論を取り上げます。また、机上ではなく、現実の分析事例を題材に皆さんと考えていきたいと思っています。

主な研究業績 『地域資源の活用による地方再生』『中国地域経済白書2008』（社）中国地方総合研究センター、2008年
『真庭市の産業振興政策立案に係る調査報告書』（独）中小企業基盤整備機構、2008年
『東広島市産業活性化方策』、東広島市、2008年
『平成16年広島県簡易延長産業連関表作成に係る共同研究』、広島県、（社）中国地方総合研究センター、2008年
『中国地方の経済圏・生活圏調査報告書』、（財）ちゅうごく産業創造センター、2007年
『東広島市における都市経済の成長分析』、広島大学『地域経済研究』第16号、2005年

在学生からのメッセージ

※令和元年度以前の入学者は社会科学部研究科マネジメント専攻の所属となります。

徐ゼミ



崔 亞鵬

博士課程前期
令和4年度入学

(1) 入学した動機

日本の大学院で静かに自分の研究を完成させたり、国際マーケティングについての活動を実際に経験したりすることによって、古い知識や情報、視点を更新し、より多角的に国際的なマーケティング活動を捉えることができるようになりたいと考えたからです。実際、私は、大学院の国際マーケティングの授業の中で、企業が海外市場に進出する仕組みと戦略の構成に強く興味を持つようになりました。広島大学のマネジメントプログラムでは、当初の狙いを達成させることができると信じています。

(2) マネジメントプログラムを選択した動機

外国人の学生にも優しく、みんなが自由にコミュニケーションをする生活学習環境で、国際マーケティングを専門とされている徐先生のゼミに参加したいことが最も重要な動機です。日常生活においても、広島大学の留学生は、充実した大学院生活を過ごしているように思います。特に、留学生にとって学習環境が整っていると思います。また、広島大学の教育方針は世界を舞台に活躍するためのグローバルな視点を持つ人材の育成を目指し、創造性の育成を重視し、諸問題を多角的に捉えることのできるような教育の実施にも力を入れていることも知り、ここを受験しました。

(3) マネジメントプログラムで学ぶ魅力

マネジメントプログラムには留学生や日本の社会人が多いので、これまでの自分の価値観や思考方式と異なる見方に振れやすく、自分の考えと違う仲間とディスカッションをすることがとても楽しいです。多国籍間の人々の間での多くの交流は自分の将来にとっての財産になります。

私はデジタル化やグローバル化が進む新たな社会を担う人材になりたいと思っています。そのため、創造性の育成を重視し、幅広い見識を持って国際感覚を養うというマネジメントプログラムの教育方針に魅力を感じています。

(4) 出願するにあたっての懸念

自分は外国人留学生であるため、普段の学術研究や授業で日本語の理解がうまくいかどうか不安でした。しかし、留学生同士と先生のサポートで、日本語もしゃべるようになり、研究や普段の授業の理解もうまく進みました。もう一つ、学校の日常情報とマネジメントプログラムの授業などの情報をうまく獲得できるかどうかについても不安でしたが、入学後に全ての情報は気軽に入手できるので、普通の学習生活に困ることはありません。

(5) 入学後、仕事に対する姿勢などで変化した点

普段の授業やゼミでの研究活動では、同級生やゼミの先生を相手として何度も自分が書いた文章をシェアして、相手からの意見を得るといった機会がたくさんあるため、語学力はもちろん、現実社会に対応する思考の方式も磨くことができました。

(6) 出願を考えている方へのメッセージ

自分がこの社会の助けになりたいという研究テーマを深めたい方は、ぜひ出願してみてください。自分でかいた汗と努力は唯一、自分の信じられるものです。マネジメントプログラムでの学習生活により、経営学の理解をより深めることができるので、自分だけの答えを見つけていくことができるでしょう。

CUI Yali

相馬ゼミ



甲斐 康一郎

博士課程前期
令和4年度入学

(1) 入学した動機

普段は、会社に勤務しております。マネジメントをする立場になり、「人」や「組織」など、様々な問題や課題が見えてきました。勤や経験では解決できない事も多く、少しでも学術的な心理を追求し、前向きに解決策を見つけ出すこと、そのために大学院に進み、学ぶ事を考えました。

(2) マネジメントプログラムを選択した動機

働きながら通学ができること、社会心理学を専門とする相馬先生のゼミに参加したいと思ったことが大きな理由です。

(3) マネジメントプログラムで学ぶ魅力

さまざまな立場の社会人、留学生も多く、普段の社会人生活では出会えない人たちの出会いが多い。また授業も様々な分野があり、絶対に自分では気づかないような刺激がたくさんあり、想像以上に学べます。このような環境はなかなかないと思います。

(4) 出願するにあたっての懸念

家庭（育児）と仕事と学生生活の3つをバランスよく

やっていけるだろうかという不安は大きかったです。再び学生になり、授業についていけるのかなという不安もありました。授業では自身の社会人経験が生かされる機会もあり、たくさん発見もあります。長期履修制度などのサポートもあり、現在も不自由なく通学できています。

(5) 入学後、仕事に対する姿勢などで変化した点

自ら要約したり、意見を述べたりする経験は、社会人として役立ちます。また授業やゼミで学ぶ内容が、普段の生活や会社の中で、「何故そうなのか?」「だからそうなのか?」という気づきとして活かされ、新しい考え方に会う事が多々あります。

(6) 出願を考えている方へのメッセージ

社会人になると、勤めている会社や組織の事、関わる人だけの範囲に収まってしまいがちです。少しでも好奇心や、疑問に感じる事があれば、その扉を開いて、新しい自分と出会って欲しいです。大学院にはその期待に応える「環境」があります。一緒に刺激しあっている仲間になってほしいです。

KAI Koichiro

秋山ゼミ



崔 琬

博士課程前期
令和2年度入学

(1) 入学した動機

大学時代はほぼ日本語を中心に勉強していました。語学の学習だけで企業、社会、日本文化に対する認識はまだ足りないと思いますし、研究活動を通じて、思考力をより一層向上させたいので、日本の大学院への進学を決意しました。

(2) マネジメントプログラムを選択した動機

マネジメントプログラムには、教員の研究テーマが多様で、より多角的な指導を頂くことができ、自由に研究したいテーマを決めて研究することが出来ます。

(3) マネジメントプログラムで学ぶ魅力

外国人留学生や社会人など、多様な背景を持つ方がたくさんいらっしゃいますので、常に新鮮な刺激を受けることが出来ます。自分は今までの人生はほとんど学校で過ごしたので、特に社会人の方と一緒に講義、ゼミに参加する時に、「社会人としての視点」の発想を聞き、新しい知見がたくさん得られました。

(4) 出願するにあたっての懸念

学部生の頃は経営学の授業ほとんど履修しておら

ず、基礎知識が不足していたことに不安でした。

在学期間中に、研究方向に関わる講義に参加することで知識面を広げることが出来ました。学内の設備や書籍など、必要なもの全て備わっていたので、研究に没頭することが出来ました。また、先生から参考書や研究のアドバイスを頂き、私自身の研究者としての成長に繋がっていると感じています。

(5) 入学後、仕事に対する姿勢などで変化した点

膨大な資料を読み込み、まとめる作業が大変だったように記憶していますが、作業を繰り返しているうちに、いつの間にか大量な情報とデータから重要な内容を総括する能力を身に付けました。これは人生に必要な能力だと感じています。

(6) 出願を考えている方へのメッセージ

広島大学院のマネジメントプログラムに進学出来て本当に良かったと感じます。指導教員の秋山先生はもちろん、他の教員からも非常に熱心にご指導頂きました。研究したいテーマが有れば、ぜひ出願してみてください。

CUI Wan

秋山ゼミ



佐伯 直高

博士課程後期
令和4年度入学

(1) 入学した動機

元々、食品メーカーに勤めていたのですが、商品が売れる様々な事象を体系的に整理したいと考え大学院への進学を決めました。MBA や中小企業診断士の資格取得といった実践的な学びの形も選択肢にありましたが、実践という意味では仕事という場がありましたので、理論的な知見が学べると考え大学院の入学を決めました。

(2) マネジメントプログラムで学ぶ魅力

議論のレベルの高さが魅力です。マネジメントといっても、会計、心理、文化など様々な領域がありますが、マネジメントプログラムではそれぞれ専門性の高い先生が在籍し、相談にも快く応じていただけています。また、学生の国籍や経歴も様々で、ゼミや院生控室(自習ができる部屋)で交流があります。専門的で様々な知見を持った先生方、学生との議論により、新しいアイデアに触れ、研究テーマが深掘り出来ています。

現在の研究テーマは修士の頃から変更しているのですが、これもゼミや授業での議論を通して、いろいろな研究分野から、興味があるテーマを選ぶことが出来た結果だと思っています。

(3) 入学後、仕事に対する姿勢などで変化した点

これまで経験則から判断していたことも、理論的な背景を元に検討することが出来るようになりました。様々な視点から仮説を立て、分析出来るようになったことで、説得力も増したと思います。

(4) 出願を考えている方へのメッセージ

研究テーマは限られた分野に過ぎませんが、論文が公開されれば、自分の論文を世界中の人が閲覧するかもしれません。今後、世界の知識に少しでも貢献できれば嬉しいです。

大学院はいろいろな知見に触れたい好奇心旺盛な方や、一つのことを突き詰めたい方にとっては、とてもやりがいのあるものだと思います。

SAEKI Naotaka

盧ゼミ



後藤 淳子

博士課程後期
令和4年度入学

(1) 入学した動機

私は、個人事業主として編集とライティングの仕事をしています。働き始めた30年近く前から「読書離れ」や「出版不況」と言われ、常に危機感を持ってきました。仕事を通して問題解決の糸口を見つけることは難しく、「学術的な側面から解決方法を考えてみたい」と思うようになり、大学院への進学を決意しました。

(2) マネジメントプログラムを選択した動機

マス・コミュニケーションに限った研究を行うのではなく、もう少し広い視座で学びたいと考えていた時に、マネジメントプログラムの説明会があり、そこで「社会の困り事すべてが研究対象です」と伺い、門戸を叩くことにしました。

(3) マネジメントプログラムで学ぶ魅力

自分の専門分野以外の多岐に渡る社会科学の学びは、新しい知識と気づきを与えてくれました。違

う分野の研究の手法からヒントを得ることもありました。先生方は幅広い研究領域を持っているため、様々な角度から助言をいただくことができ、自分の固定概念を打ち破るきっかけになりました。

(4) 出願するにあたっての懸念

仕事、家庭との両立ができるかどうか不安でした。家族の協力を得て、研究を続けています。

(5) 入学後、仕事に対する姿勢などで変化した点

社会科学の知識が求められる報告書作成等を請け負うようになり、仕事の幅が広がりました。

(6) 出願を考えている方へのメッセージ

大学院での生活は新しい知に触れ、学友と出会い、自分を成長させる場となりました。研究に悩むことも多々ありますが、それを乗り越えた先の楽しみはかけがえのないものだと思います。

GOTO Junko

金ゼミ



梁 克為

博士課程前期
令和4年度入学

(1) 入学した動機

私は学部生時代に、経営と工学の知識に触れ合った学習経験があって、企業に対する評価や分析方法に興味を持つようになりました。しかし、学部生の頃に勉強した企業経営に関する知識が少し足りないと思い、経営やマネジメントについて学べる大学院に進学する決意をしました。

(2) マネジメントプログラムを選択した動機

学部生の頃に勉強した、「日本式経営」と「アメリカ式経営」が中国の経営陣や経営方式に大きな影響を与えたということが心に残っており、日本の大学院に進学して経営学を勉強することに決めました。

(3) マネジメントプログラムで学ぶ魅力

マネジメントプログラムに進学した後、学びたかった知識を勉強できた以外にも、様々な関連分野の知識に触れることができ、予想以上に幅広く学習することができました。例えば、今進行中の研究は入学時に提出した計画書をベースにしながらも、関連分野の授業で学んだ知識を加えて、より新しい内容の研究テーマになっています。こうした積み重ねに

よって自分が成長していると実感しています。

(4) 出願するにあたっての懸念

元々経営学部出身ではない私が、授業の内容を理解できるかどうかということに、当初はすこし心配でした。また、外国人留学生であるため、先生にも心配をかけました。しかし、入学してみると、その心配は杞憂だったように思います。

(5) 入学後、仕事に対する姿勢などで変化した点

授業やゼミなどでの発言や報告は自分の意見を簡潔に伝えることが求められるため、良い勉強になります。また、他人の意見を聞き、正しく理解するため、就職活動をする上でもよい訓練になります。

(6) 出願を考えている方へのメッセージ

マネジメントプログラムでは、色んな分野の先生が授業を担当しています。たとえ、全く知らない知識や情報に遭遇しても心配は要りません。ここでは、あなたを困らせる難問に対して、何かしらの回答をもらえる先生が待っています。未来に向かって進みたい、勉強したい方はぜひチャレンジしてみてください。

LIANG Kewei

修了生からのメッセージ

※本プログラムへの改組前のマネジメント専攻修了生

会計・経営情報分野

名田 滋 [税理士法人職員] 博士課程前期 平成30年度修了

共存する場
専門性と汎用性が

私は、「税法を一から学び直したい」と思い、大学院への進学を決意しました。税理士法人での実務において、「一つの条文について、なぜ異なる解釈が生じるのか」という疑問を抱くことがありました。条文解釈については、個人の直感や感性に頼るのではなく、論理の裏打ちが重要となります。さらに実務では、条文解釈をしたうえで、経済取引に当てはめなければなりません。これらの過程で、幅広くかつ奥深い税法の知識が要求されるためです。大学院では、諸問題に対する個別具体的な解決策ではなく、それらに共通する原理原則を学びたいと考えました。修了後も研鑽に努めることで、生涯にわたって役立つ知識を習得したいと考えたためです。そこで、アカデミックな研究をするためにマネジメント専攻を選択しました。マネジメント専攻の講義は、議論が中心となります。したがって、事前課題に対し、調査、考察、結論付けをしなければなりません。議論を通じて、他者の視点や考え方などに触れることで、新たな疑問が生まれることもあります。これらを繰り返すことで、知識の幅や深さ、視野の広がりを享受することができます。マネジメント専攻の先生方は、専門領域が多岐にわたっています。よって、先生方の専門領域に応じた指導が受けられます。かような意味で、専門性と汎用性が共存する場であると言えます。また、年齢や立場などが異なる方々と交流できる貴重な場という側面も持っています。ここでの経験は、画一的なものではありません。入学前には想像すらできないような、出来事や出会いなどもあるためです。より多くの方が経験してくださることを切望しています。

NADA Shigeru

会計・経営情報分野

桑田 彰 [大学非常勤講師] 博士後期課程満期退学

道は開ける
あきらめなければ

私は30余年勤めていた航空会社を、大病が原因で退職しました。病気が再々発して受けた厳しい治療のあと、やっと退院して自宅療養しているときにJALの経営破綻がありました。このJALの経営破綻が研究をはじめのきっかけとなりました。JALの経営破綻後、サラリーマン時代に疑問に思っていたことを調べはじめ、「最低でも1年に1本は論文を書き、それを10年は続ける。」というのを目標(生きがい?)にして研究を行い、毎年学会で研究成果を発表しました。そうこうしているうちに、それらをひとつのまとまったものにしたいと思いはじめ、博士課程後期に入学することにしました。入学後は、過去の研究成果などを学術的なものにまとめるのに苦労しましたが、先生方の適切な指導によりなんとか論文作成を進めることができました。短期間のうちに病気が再々発して「何もしなければあと3ヶ月。」といわれてから15年以上が過ぎました。人生も、研究も、あきらめないことが大切なのではないでしょうか。あきらめたらそれで終わりです。在学中いろいろなことがあり、私は満期退学となりましたが、満期退学となってもあきらめなかったので博士学位請求論文を提出することができました。受験をお考えの皆さん、是非トライしてください。そして、あきらめずやり通しましょう。マネジメント・プログラムの先生方は、社会・職場においてさまざまなことに問題意識をもつ皆さんを待っています。

KUWATA Akira

会計・経営情報分野

李 韻涵 [会社員] 博士課程前期 令和2年度修了

知識を習得する場でもあり、
思考力を鍛える場でもある

私は大学4年の後期に、広島大学の経済学部で交換留学生として勉強していました。交換留学の期間が終了した後、明確に研究したいテーマが中々見つかりませんでした。昔から関心を持っていた人の行動、そしてその行動の背後にある心理についての勉強意欲があり、マネジメント専攻(現、マネジメントプログラム)を受験しました。第二言語を用いて専門知識を勉強するのは決して容易ではありません。しかし、今振り返ってみれば、その「ツライ」2年間があったからこそ、語学力、学習力、そして一番大切な思考力が思った以上に鍛えられたと思います。マネジメントプログラムでは、会計・経営情報分野の授業のほか、組織・経営、地域・交流分野の授業も受講できます。そのため、知らないうちに自分の知見が広がり、物事への理解力も深まりました。雑乱な会話をしがちな私でも、ゼミや授業では、簡潔かつ分かりやすく自分の考えや情報を整理しなければならないため、ゼミの先生の指導のもと日々ロジカルシンキングの「自主練」をしているようなものでした。それによって、より論理的に物事を考えるようになり、思考力が自然に鍛えられました。マネジメントプログラムには、留学生のほか、多種多様な社会人の学生も在学しています。それは私にとって非常に刺激的でありがたかったです。常にみなさんから新しい刺激を受け、思考中につまずいたときに、自分にはない発想を与えてくれました。自分の中では、広島は第二の故郷です。おそらくそれは、そこには広島大学があり、マネジメントプログラムがあり、そしてたくさんの良師益友がいるからです。ぜひこの感動をたくさんの方に共感していただきたいと思います。

Li Yunhan

会計・経済情報分野

森田 智子 [助産師] 博士課程前期 令和元年度修了

現場で浮かんだ
問題の解を見つけ出す

私は、病院で助産師として働いています。大学院進学を考え始めたのは、日々の業務に慣れてきた5年目の頃でした。業務上のある問題意識が芽生えたことがきっかけです。その問題意識を解決するために、看護系の大学院進学も考えましたが、医療関係者以外の職種と関わる機会がほとんどなかった私にとって、様々な職種や年代の人が集まる社会人大学院に魅力を感じ、マネジメント専攻を選びました。また、夜間に講義を選択できるということも、仕事を続けながら通う上では重要なポイントでした。

実際に通い始めてからは、多様な職種や経験年数の方々、中国からの留学生さんなど、これまで関わることのなかった方と一緒に学びを共有することができ、幅広い視点や思考を持つことができました。また、講義の内容も多岐にわたり、助産師として働いているだけでは知り得なかった知識を学ぶことができました。当初、抱いていた問題意識についても、研究調査を通して少し解決に近づいたと感じています。仕事と研究の両立は、身体的にも精神的にも大変でしたが、それ以上に大学院での出会いや経験は貴重なものになりました。ぜひ多くの方にチャレンジしていただきたいと願っています。

MORITA Tomoko

地域・交流分野

単 海林 [大学教員] 博士課程後期 令和2年度修了

多文化共生と
異文化研究素養養成の場

日本語教育に携わっていることから、日本の社会、文化を身を持って感受し、この目で見た事情を学生たちに伝えたいと考え、広島大学社会科学部研究科マネジメント専攻に入学しました。異なる言語をもつ人間同士が如何にコミュニケーションをとるかに非常に興味を持っているため、翻訳関係のテーマを課題にしました。というのも、翻訳は異文化コミュニケーションの欠かせない一環でもあり、人々の理解、疎通に役立つものと思うからです。在学中、博士論文作成の基本から専門分野に至るところまでいろいろ教わりました。とりわけ、先生方の研究ぶりを目の当たりにして感銘を受け、私の大なるエネルギーとなり、教育者としての初志を固めることができました。今、日本語講師として中国の大学で教えていますが、広島大学で教わったものを活かしながら、言語能力だけでなく、異文化コミュニケーション能力を持つ学生の育成を今後の目標にしています。マネジメント・地域・交流というところでより多くの出会いがあるものと私は信じています。

SHAN Hailin

地域・交流分野

中島 佑輔 [地方公務員] 博士課程前期 平成30年度修了

ライフワークの
集まる場所

私は中国地方のとある山麓地域を拠点にフィールドワークを行っています。山にはお寺や神社、宿があり、お地蔵様が大勢いて、色々な花や鳥が生息しています。訪れる側も多種多様で、参拝客に登山客やスキー客、カメラマンや地域おこし協力隊、夏休みの宿題を抱えた子供たちや研究者もいます。豊かな自然の山でもあり御神体でもある山を中心に様々な関係性が重なるこの場所は、「聖地」としてどのように調えられているのか。こうした問いにもとづき、「聖地」マネジメントの研究を行っています。

ここマネジメント専攻には、大学から進学した人だけでなく留学生や社会人学生も多くいます。留学生たちとの出会いは新鮮で、想像していたよりずっと親しくなれたと同時に、違いに驚くことも沢山ありました。社会人学生の方たちは一見普通に見えても、自身の生き方を一度問い直し進学されたからなのか、話を聴いてみると何かパッションを内に秘めているという感じがあります。私は前期課程から後期課程へと進学する際に、自分のフィールドの一部を管轄する役場に入庁しました。聖地マネジメントを捉えるために「公」の視角も重要であることと、研究が地方自治体の良き政治に寄与できるかもしれないと思ったからです。と同時に就職してあらためて感じたのは、このマネジメント専攻が「社会」の現実とその実践からあえて一步引く勇気を持った人のための場所として大切であるということです。共に問い直し、より冴えたビジョンを論文や発表を通じて提示し、各々に絡み合う関係性を調べていく。そのような研究=ライフワークが交わる場がここにはあると思います。

NAKASHIMA Yusuke

Q & A

1	Q MBAとの違いを教えてください。	▶	A 本プログラムは、科目履修による実践能力の向上を目指す専門職大学院とは違い、研究能力を養うゼミナールを重視しています。2年間の研究指導を受けて修士論文を提出された方に、修士(マネジメント)もしくは学術の学位を授与します。
2	Q 出願に際しては第一希望の教員の許諾が必要ですか？	▶	A 出願に際して教員の許諾の有無は問いません。ご自身の研究テーマに合った教員がいるなら、出願しても構いません。
3	Q 学部3年生から飛び級して博士課程前期に進学することは可能ですか？	▶	A 出願前の事前審査において「資格あり」と認められれば、出願可能です。
4	Q 実務経験が無いのですが、出願可能ですか？	▶	A 実務経験を出願の条件とはしていませんので、出願可能です。
5	Q 研究計画書を書く上での注意事項はありますか？	▶	A 志望理由、研究方法と実施計画、終了後の実践について、具体的に記述下さい。また、オープンキャンパス説明会にて、研究計画書についての詳細な説明を行っています。
6	Q 過去の入試問題を閲覧できますか？	▶	A 東千田図書館・東千田地区支援室・東広島キャンパス中央図書館の3か所にて過去2年分の閲覧が可能です。(複写不可)
7	Q 受験の前に教員と個別に会って、研究テーマや研究計画書について相談できますか？	▶	A 本プログラムでは受験者の評価を公平に行うために、受験希望者が事前に教員と個別に相談することを好ましくないと考えています。オープンキャンパス説明会をご利用下さい。
8	Q 社会人ですが、週に1~2回の通学で修了可能ですか？	▶	A 博士課程前期の1年目は土曜日他に、平日に2日程度通学する必要があります。それが困難な方は長期履修制度を利用してください。2年目以降と博士課程後期は研究指導の時間を教員と調整すれば可能です。
9	Q 長期履修制度とは何でしょうか？	▶	A 事情により博士課程前期の標準履修年限(2年)での修了が困難な方は、入学後の申請により、3~4年かけて計画的に履修することができます。この制度を利用した時の授業料の総額は標準履修年限と同額です。
10	Q 修士論文の閲覧は可能ですか？	▶	A 修了生から許諾が得られているものは閲覧可能ですが、そうでないものは閲覧できません。詳細はマネジメントプログラム長室にお尋ね下さい。
11	Q 自家用車での通学はできますか？	▶	A 公共交通機関での通学が困難な方は、許可を得て、自家用車での通学が可能となる場合があります。

※より詳細なQ&AはプログラムHPをご覧ください。▶ <https://www.hiroshima-u.ac.jp/mgt/>

オープンキャンパス

説明会

- 【日 程】** 第1回目：6月末から7月上旬の土曜日を予定
第2回目：11月中、もしくは12月中の土曜日を予定
- 【場 所】** 広島大学東千田キャンパス
※詳細な日時、場所はプログラムHPをご覧ください。
- 【内 容】** 1. プログラムの入試・教育・指導内容の説明
2. 研究計画書の書き方
3. 在学生のトークセッション
(大学院生の生活や受験体験など生の声が聞けます)
4. Q&A(教員が個別の質問に回答します)
5. 1週間体験入学の説明

体験入学

- 【日 程】** 説明会の翌週1週間
- 【場 所】** 広島大学東千田キャンパス
- 【開講科目】** 組織・経営、会計・経営情報、地域・交流、アジアマネジメントの各分野から開講

問い合わせ先

〒730-0053 広島市中区東千田町1-1-89
広島大学東千田地区支援室
TEL.082-542-6962
E-mail:senda-gaku-sien@office.hiroshima-u.ac.jp

広島大学マネジメント学会とは、広島大学大学院人間社会科学研究科人文社会科学専攻マネジメントプログラムの教員、在学生、修了生などによって構成される学術団体である。

設立趣意

広島大学マネジメント学会は、あらゆる組織が直面する問題を研究領域として捉え、従来の学問分野単独では扱えない課題を研究対象とし、経営学、経済学、行動科学、情報科学、異文化コミュニケーション等の産官学にわたる多くの研究者と実務家が自由闊達に意見・情報の交換を行い、学際的な研究交流および研究発表を実施するための学術組織である。とくに、その設立の基本的な目的は、高度情報化社会において必要となる知識・情報を交換し、企業経営および地域政策の諸課題をそれぞれの立場から討論し、新たな視点に立つ解決策を生み出す「場」を提供することにある。個々人の考え方や違いを互いに尊重しつつ、設立趣旨に賛同するものはすべてこの学会に参加できることとする。

活動内容

『マネジメント研究』の発行

『マネジメント研究』とは、広島大学マネジメント学会員が研究成果を公表するための学術誌である。学会員であれば投稿できるが、その掲載の可否については査読制(レフリー制)を採用している。



『広島マネジメントレビュー』の発行

『広島マネジメントレビュー』は、会員の研究促進を目的とした、研究成果を適宜公開する電子刊行物(Electronic Publication)である。投稿者は(1)マネジメント学会所属のマネジメントプログラムスタッフ、(2)マネジメント学会所属のマネジメントプログラム博士課程後期修了者、(3)上記(1)および(2)との共同執筆者、(4)マネジメント学会所属のマネジメントプログラム博士課程前期・後期在籍者を1st Authorとし、2nd Authorを上記(1)とする、共同執筆者、(5)その他特別に編集委員会が承認し、または依頼したものである。

『広島大学マネジメント学会ディスカッションペーパー』の発行

『広島大学マネジメント学会ディスカッションペーパー』とは、広島大学マネジメント学会員が研究の過程または成果を公刊に先立って、迅速かつ簡易な方法で印刷して発表するためのものである。

研究会等の開催

広島大学マネジメント学会は、学会員の学識を向上させ、また、その懇親・交流を図るために、定期的に研究会等を実施している。学内および学外の識者や実務家などの講演会や研究報告会、シンポジウムを開催し、同時に、懇親会を開催することもある。

ACCESS INFORMATION

JR広島駅から

- 広島電鉄(市内電車)
 - ▶1番線(紙屋町経由)広島港行「日赤病院前」下車徒歩3分(所要時間30分)
- 広島バス
 - ▶21-1号(宇品線)広島港行(紙屋町経由)「日赤病院前」下車徒歩3分(所要時間20分)
 - ▶50号(東西線)アルパーク行(御幸橋経由)「日赤病院前」下車徒歩3分(所要時間15分)
- 循環バス
 - ▶まちのわらう(左回り)
広島駅 新幹線口1番のりば「日赤病院前」下車徒歩3分(所要時間16分)

JR西広島駅から

- 広島電鉄(市内電車)
 - ▶3番線(紙屋町経由)広島港行「日赤病院前」下車徒歩3分(所要時間40分)



HIROSHIMA UNIVERSITY

広島大学大学院人間社会科学研究科 人文社会科学専攻マネジメントプログラム

〒730-0053 広島市中区東千田町1-1-89 広島大学東千田地区支援室

TEL.082-542-6962 FAX.082-542-6964

E-mail:senda-gaku-sien@office.hiroshima-u.ac.jp

<https://www.hiroshima-u.ac.jp/mgt/>